

# さらなる前進誓う求道者 河田 浩貴

かわだ・ひろたか  
1979年9月6日生まれ。東京・大島中一→神奈川・横浜商工高(現・横浜創学館)→順天堂大で日本一をめざし、大学卒業後は順天堂大コーチャクラブチームの市川FOGでプレーした後、ドイツへ。努力を重ねて道を切り開き、ブンデスリーガ2部のデアリーツェで2年目のシーズンを迎える。



起用へのほどかしき、契約への不安やチームスタッフへの不信任にも包まれる毎日。河田の心は大きく揺れた。

**求道者に徹して前進!!**

それでも、揺れた心は原点に返る。

「自分で決めたことだ」「やるしかない」「とことんやるぞ」

メールなどを通してエールを送って支えてくれる多くの人たちにも感謝の思いを伝えるためにも、弱気になるわけにはいかなかった。

紆余曲折の末、4月にはデアリーツェとの再契約を交わし、チームもラストスパイトで10位まで順位を上げ、シーズンを終えた。

条件だけを考えれば、ドイツの他のチームへの移籍や他国のチームへの移籍する道もあった。

だが、苦勞しながら1シー

ズンからついにブンデスリーガに。意欲いっぱいスタートを切った河田。

2軍時代は、1軍に上がるという確固たる目標があった。1軍では、チームで一番いい選手で、同じセンターが本職のロシア人・マルツェフと競い合い、先発出場、少しでも長い時間、コートに立つことを目標にした。

1年間、フルで活動するのは初。

遠征試合への移動距離も延び、2軍時代とは比べものにならないハードなものだった。どんなタイムングでトレーニングをしたらいいか? 休暇はどう入れていけばいいか? 試行錯誤を繰り返しながらの戦い。

迷いつつも、2軍時代同様、全体練習はもちろん、個人練習、居残り練習も黙々とこなした。

「そんなに練習してどうなる?」「オーバワークだから、コンディションが崩れるんだ」

引き続き周囲からは、奇異の目で見られ、馬鹿にされるもした。

そんな雑音も、「身長が2mあって、シュートスピードも速いというなら、特別な目で見られ、馬鹿にされるもした。」

「自分のハンドをしやすい」ということに加え、マルツェフ放出も濃厚で「出場時間が増えるなら」と結んだデアリーツェとの契約。

フタを開ければ、マルツェフが残留するばかりか、新たに加わるポーランドU23代表選手も同じセンターという、どんでん返しも。

苦難の道を切り開いてきた河田には、新シーズンもいばらの道が待ち受けているが、これでもかと襲い来る苦難を、ネガティブにとらえている河田ではない。

「ブンデスリーガーになれたという結果はある。でも、もっといい選手になりたい。これまでの経験を踏まえて、もっといい選手になれる確信

## 読者プレゼント



河田選手の直筆サイン入りカードを6人の方にプレゼントします。77ページ左下の弊社ハンドボール編集部まで、ハガキ、FAX、メール、ホームページからご応募ください。住所、氏名、連絡先電話番号と「河田浩貴選手サイン入りカード希望」と明記するのを忘れなく。締め切りは8月15日。応募多数の場合は抽選、当選の発表は発送をもって代

筋トレやランニングもしている。でも、自分はそれをやらなきゃコートにも立てない存在。必要だからやってみるんだ」と言い聞かせながら、雑音を封印。

試合ではチャンスを与えられれば、全力投球した。得点を量産したわけではなく、チャンスメイクや7m T獲得と河田らしい仕事も果たした。

**葛藤もあつたシーズン**

しかし、どれだけがんばっても、結局は「マルツェフとは」経験が違う」と言われ、2番手のまま。

「マルツェフを抜けばいい。それがプロの仕事」

「プロは努力比べじゃない。結果なんだ」

そう心の中で自分を奮わせても、2番手での起用が続くと、「オレはなにしているんだろ?」と目標を見失いかけた。

さらには、1月の段階で契約延長の打診を受けたものの、決して運営資金が潤沢ではないデアリーツェ。

契約交渉が「もう少し待ってくれ」と先延ばしにされた。その間に「契約切れの選手は誰ひとりチームに残さない」といった記事が、地元紙に掲載されたことも。

があるし、経験をつなげていかなないと意味がない」

求道者・河田らしく、ブンデスリーガ2シーズン目も前進あるのみ。

もちろん、新たな葛藤もあるだろう。

これまで以上の思わぬ苦難に見舞われるかもしれない。けれども、河田にはゆるぎない原点がある。

「ハンドボールにかける情熱は誰にも負けない」。そう言っている人には絶対負けません。

人生ハンドボールですから」

ゆくゆくは帰国して教壇に立つことを夢に描きつつ、ハンドボールをやり続けたい気持ち、全力で戦っていられる場があるかぎり、河田はボールを追い続ける。

「最終的に指導者になりたい。そのためには少しでも長く、いろいろな経験をすることが活きるはずなので、海外でプロ選手としての経験を積んでおくのは大事」

そんな強い思いを胸に、海を渡った河田亮介。

06年12月号60ページでもご紹介しているように、昨夏はドイツ2部リーグ、アウェと契約寸前まで行き、出発の手はずを整えた後に話は振り出しに。

懸命のチーム探しの結果、落ちついたのがドイツ4部リーグのビルナだった。

振り返れば、スタートでのつまづきは貴重だった。

もともと「イレギュラーなことは日常的に起きるもの。困ったことも含めての海外挑戦」と腹をくくっていたこともあり、つねに自分でどうにかできることとできないことを冷静に判断。

それに、昨夏のすつたもんだを思えば、何事もポジティブにとらえることができた。

ビルナでは合流初日にスタートから「45度とサイドの2つのポジションをやってもらう」と告げられた河田。

「新しいことができる」とその指令も前向きにとらえた

が、同じ右45度には河田と同じ年で、世界選手権にも出場したキャリアのあるチェコ人、マルティンが優勝請負人として迎え入れられていた。

さらには、センターもチェコ人のジョセフ。

ビルナはこのチェコ人コンビ中心のチームで、自ずと河田の出番はサイドに。

DFもトップやサイドで高い位置でかき回したり、速攻に出る役割。

最終的にチームは独走状態で優勝。3部昇格と、大きな目標を達成。

河田もすっかりと役割を果たし、優勝に貢献した。

けれども、何点とったというように、活躍が数字に現われづらい立場。

チームが勝っているときは周囲やサポーターもその役割を評価してくれるが、いざ連敗でもすると、残した数字で評価され、つらい思いも味わった。

「個人的に、プロ選手としてはどうか?」

ポジション、役割的に迷い続けるでしょうね」と河田。

ビルナと首尾よく契約を更新したものの、新シーズンからはチェコの1部リーグから3選手が加わり、スタッフからは「競争がある」と宣告もされている。

「ハンドボールで生活をしたい」

6月15日に帰国。新シーズンに向け、のんびりエネルギーを蓄えるのかと思いきや、日本在住時から若年層の普及・指導にも尽力してきた河田は、講習会活動をはじめ、ハンドボール一色の生活を送り続けた。

「ハンドボールはこういうものだ」と本格的に教わったのが、中部大4年になったときに監督に就任した蒲生さん(晴明 現部長、日本協会強化本部長)から。

ゴールデンエージ(10~15才)に知識のある人に教われれば、絶対にうまくなるし、自分ももっと早く本格的に教えてもらっていたらとつねづね思っていた」ことに加え、ホ

が、同じ右45度には河田と同じ年で、世界選手権にも出場したキャリアのあるチェコ人、マルティンが優勝請負人として迎え入れられていた。

さらには、センターもチェコ人のジョセフ。

ビルナはこのチェコ人コンビ中心のチームで、自ずと河田の出番はサイドに。

DFもトップやサイドで高い位置でかき回したり、速攻に出る役割。

最終的にチームは独走状態で優勝。3部昇格と、大きな目標を達成。

河田もすっかりと役割を果たし、優勝に貢献した。

けれども、何点とったというように、活躍が数字に現われづらい立場。

チームが勝っているときは周囲やサポーターもその役割を評価してくれるが、いざ連敗でもすると、残した数字で評価され、つらい思いも味わった。

「個人的に、プロ選手としてはどうか?」

ポジション、役割的に迷い続けるでしょうね」と河田。

ビルナと首尾よく契約を更新したものの、新シーズンからはチェコの1部リーグから3選手が加わり、スタッフからは「競争がある」と宣告もされている。



6月15日に帰国。新シーズンに向け、のんびりエネルギーを蓄えるのかと思いきや、日本在住時から若年層の普及・指導にも尽力してきた河田は、講習会活動をはじめ、ハンドボール一色の生活を送り続けた。

「ハンドボールはこういうものだ」と本格的に教わったのが、中部大4年になったときに監督に就任した蒲生さん(晴明 現部長、日本協会強化本部長)から。

ゴールデンエージ(10~15才)に知識のある人に教われれば、絶対にうまくなるし、自分ももっと早く本格的に教えてもらっていたらとつねづね思っていた」ことに加え、ホ

ンダ在籍時代、NTSの近畿ブロックトレーニングを担当。その縁で郷里・奈良の真弓クラブとつながりができ、子供たちを教えることの楽しさにとりつかれた。

洛北高(京都)でインターハイV3をめざす乾彩友美選手らは、河田が足しげく指導に通ったときの教え子だ。

若いころ、日本代表の合宿に参加し、中川善雄選手(大崎電気)や田場裕也選手(F.C.琉球)から「トップレベルの選手が、現役でいるうちに、多くのことを若い世代に伝えていくことに意味がある」という熱い思いを聞き、感銘を受けたことも現在につながっている。

昨年の8月号で紹介したクラブチーム、アッシュ・クレーを主催し、地域の指導にも力を入れている辻村昌之さんを通じての講習会活動や遠く離れているにもかかわらず、

# 苦難を前向きにクリア 櫛田 亮介

くしだ・りょうすけ  
1977年6月29日生まれ。奈良・一条高→中部大→ホンダ→ホンダ熊本で活躍。昨夏、一生ハンドボールで生活していくために、一念発起してドイツへ。4部リーグ・ビルナの優勝に貢献し、新シーズンも3部に昇格したビルナと契約更新。指導・普及活動にも積極的に力を注ぐハンドボールの虫。



DVDをやりとりしてのアドバイスやオンラインでのミーティング参加を願い出てきた滋賀医大の学生(左下写真)への指導など、シーズン中にハードといってもいいスケジュールをこなした。

プレーはもちろん、こうした指導・普及活動も含め、「田場さんや宮崎大輔(大崎電気)のようにプレーだけで人を引きつけたいのはやまやま。でも、自分のような一風変わったキャリアの選手でも、ハンドボールで食べていけるんだと、若い子たちに夢を与えていきたい」と河田。

苦難、困難をポジティブに乗り越えてきた男のドイツ2年目も、おおいに楽しみだ。